

『東海の社会』 1960年9月（東京書籍）

授業分析について

国立教育研究所 矢口 新

授業の実態を分析する方法は最近次第に進歩して来た。それは授業をどのような観点から問題にするかということと、密接な関係をもっている。

現在行なわれている授業分析の形のもので、一番早く行なわれたのは、昭和26年頃から行なわれた、国立教育研究所の「小中学校教育課程実態調査」においてのものであろう。もちろんそれ以前でも授業の分析ということが行われなかったわけではない。戦前にも行われていた。がそれらは一般的には方法論がはっきりしていなかったといってよいと思う。方法論があいまいな授業研究は、研究授業をやって、そのあとでみんながディスカッションするというやり方である。授業を見た人が、それぞれ自分の意見に従って論を展開する。同じものを見ても、見る人の見方によって様々な姿のものが見られるから、その見られたものは、みんなに共通のものとならない。その共通性を発見するだけでも大変である。そういう地盤でディスカッションがなされると、論が散漫になるのも致し方がない。しかしこれも広い意味での授業の分析であったのである。

それにつづいて、或はそれと併行して行われていたものに、実践記録による授業の分析的研究というのがある。これは、授業をする先生が自分でその授業の進み行きを記録にとっておいて、それを材料として検討をする方法である。授業がどういうものであるかということは、授業する先生の考え方によってきまる面があるから、その先生によってまとめられた実践記録は、それをよむ他の先生達にとっては、直接授業をみたときのように、個々の先生達にばらばらに受けとられる可能性は少ない。もちろんどん

なものでも読む人によって受けとり方はちがうが、授業をみるよりははるかに、その差は少ない。そこでのディスカッションはまとまりをもち得る可能性があるが、問題はその実践記録の客観性であろう。実践記録には本当のことが書かれていないなどというのではない。記録をとる授業者は精一杯真の姿を書こうと努力しているのである。しかしそれにもかかわらず、授業する者の目が強く働いていてその目でまとめられるのである。或る意図をもって授業すると、その意図にかなったものは鋭く目にうつるが、それ以外のものが見えなくなるのである。その点で、実践記録はそれなりに或る役割を果すけれども、またそこに限界もあったわけである。

「小中学校教育課程実態調査」で用いられた方式は、第三者によって記録をとるという観察記録方式である。どうしてこのような方式がとられたかという、授業の研究について或る観点があつたからである。当時カリキュラム構成の問題が教育問題としては重要な問題であつて、漸く一つの方向がきまりかけていた時であつた。それが具体的に授業の上へのどの程度はつきりした形をとってあらわれて来たのか。いわばカリキュラムの現実的形態、具体相が問題になって来たのである。カリキュラムの理念や理論は一応ととのつて来たのであるが、それがどの程度、授業の実際にあらわれているか、例えば問題解決学習というも、それがカリキュラムの上で考えられたように実際に具体の授業にあらわれているかどうか、そこにはどのような条件があるのか、何か現在の授業の方式では成立させにくい条件が、或は生徒の側に、或は教師の側に、或は施設設備の点

にあるのではないかどうか、このようなことが問題になる。こういう問題の究明になると、授業者の目による実践記録では限界があるので、もっと第三者的な目が必要になる。そこで、観察記録方式になったわけである。

この記録では、教師の活動、生徒の活動というようにわけて、その相互の関連の仕方を記録にとって行くという方法がとられ、しかも5分ないし10分おきに、時間をくぎって、どのような内容にどれだけの時間がかかれたかを分析するようにしたのである。ここで問題にしたことは主として、授業のプロセスであった。或は、教育内容の展開の過程を問題にしたといってもよいかもしれない。日本の授業方式は問題解決学習であろうとなかろうと、多くは教師と生徒の間の講義問答方式をとっているが、その上にのった問題解決過程という教育内容の流れが問題だったのである。ここでは導入、展開、終末などという段階が形式的にとられているが、それが果して或る問題を真に生徒が科学的に追究する過程になっているかどうかについては、大きな疑問が提出されたのである。いわば教師の意図した問題解決過程が、必ずしも生徒が具体的に科学的究明をしていく過程になっていないことが分析されたわけである。

さて、この分析はそれ以上に進んでいないのは、カリキュラムの視点が強く、いわば教師の立てた教育の計画が、クラスの授業の中で、どのような筋をたどっているかという点だけを問題にしたからである。いわば、教育の主として内容の展開が問題になっている。その点では極めて限界があるといつてよい。授業の筋としてどのような所に問題があるか、例えばそれは正しい問題解決のプロセスとなっているかというように所にだけ視点がある。しかし若しかりにその授業の筋がかりに問題解決の筋になっているとしても50人の学級のすべての生徒に学習が成立するような授業になっているかという視点を立てると、この授業の分析はまた変わって来なくてはならない。ただ授業の筋が正しいかどうかならば、教師－生徒の講義－問答の進み行きは一つの線とし

ても考えられる。しかしその生徒は実は1人ではなく50人である。教師と生徒の間には50本の糸があるわけである。その50本の糸について1つ1つデータをとらなければならないことになる。或は50本の糸の1つ1つについてデータをとらないとしても、何等かの方法で、そういう50人の生徒の活動の仕方を明らかにしなくては、学習の成立のプロセスは明らかにならないのである。授業というのは結局は1人1人が成長して行くのに対して役割を果すべきものであるから、そういう分析がなされなければ、正しい分析にはならないということが出来よう。

現代はそういう考え方からの授業分析が次第に発達しているのであって、その発端としては、例えば、広島大学の末吉教授達のすぐれた業績があるのである。末吉教授のは、集団学習の研究という方向で、集団の中の1人1人に目を付けると、現在の一斉授業が多くの問題をもっていることを指摘されている。そこから教授は小集団学習というような方式も提唱されるわけであるが、そのような問題はまだまだ今後多くの検討を経なくてはなるまい。小さい集団をどうしてつくるか、どのような問題ならば小集団学習という形で授業が行なえるかどうかというような問題もあろう。50人の一斉授業ならば、教師がたえず指導をなしうるが、小集団になると、1つの集団に対して教師はたえず付添っているわけに行かないということになる。集団がとりあげる問題の性質を考慮に入れると、必ずしも一斉授業にかえるに小集団をもってすればよいということにはならないといふべきであろう。小集団は生徒だけの集団として活動し得るような活動をするということになるか、或は時々教師の指導が加わればよいという種類の活動になろう。それは具体的にどのような問題であるかということは、今後の研究問題になるであろう。そういう見地からの授業の分析も必要になって来る。小集団の活動を分析して、どのような活動が行われ、それがどのように学習として成立して行っているかというような実験的な分析をも必要としてくるで

あろう。

所で、1人1人の子供に学習が成立しているかどうかというような分析になると、これはなかなかむつかしい問題がある。現在われわれは学習の成立とか定着とかいうことを大体テストによって、しかもペーパーテストという方式で見る習慣があるが、この方式に大きな限界があるのである。そのことは誰も知っているが、しかも結局はそのテストによってしか資料を得られないので、実際問題として物を考えるときには、ペーパーテストの材料に支配され勝ちである。そしてペーパーテスト以外でしらべなければならぬことについては見のがしている。その結果ペーパーテストを左右する点のみが、授業の問題として考えられて来る。例えていえば、思考のプロセスよりも、結果だけが重要視される、プロセスぬきで、言葉だけの記憶でもテストがよければよいことになる。或は同じ思考でもプロセスをスピードをもって通過し得るか、たどたどしく通過するののかということも、ペーパーテストでは余りはっきりしないことがある。或はプロセスをたどるスムーズさの程度ということ、そういうことも問題で、これは応用ということや、或る考え方の他への適用ということにもなるであろうが、今のようなペーパーテストでは限界があるのである。

授業の分析を生徒1人1人の活動についてやるという考え方になって来ると、1人1人の活動のプロセスを分析するという方式がもっと考えられて来なくてはならない。そこにプログラムアナライザーの如き、メカニズムによる授業分析も生れて来るのである。つまり生徒の思考のプロセスを細かく区切って、ひとつひとつについて1人1人の反応をさぐり出さうということになって来るのである。それによって、或る生徒には適した授業であっても、或る生徒には適した授業でないかも知れないということがわかつ

て来る。若しプログラムアナライザーの如きものを授業の中で使いながら、教師が授業をすすめるならば、その場その場で、生徒の反応を確かめてそれに対して、その場で教師の指導を生み出して行くことも出来るであろう。つまり授業分析を授業の進行の中に位置づけることになるのである。

しかしここまで考えて来ると、もはや授業というものを50人一斉の活動として考えなくてはならぬ地盤が段々なくなって来る。本来授業を受けている生徒は、1人1人それぞれの活動を行っているのである。全く質がちがっているわけではないが、少くともそのスピードはちがっており、質についても細かく考えれば、異っていることもあるわけである。それならば1人1人の活動ということ認めて、その上でその活動を分析することは出来ないかということも考えられる。それは例えば、最近考えられ出した1人1人に渡すプログラムシートの如きものを使うことである。それを渡して生徒1人1人が学習して行く所で、その生徒の考え方がどのようになっていくかをみることが出来る。一斉に話を聞いても、それがペーパーに書いてあるものを読んでも、頭の論理の動きには本質上ちがいないわけであるから、ペーパーで、そういう動きを分析することも出来ることになる。こうなると、もう授業分析ということだけでなくとも云える。授業分析というのは、一斉授業の分析という感じが深い。それを1人1人の生徒の学習活動の分析というように割り切ってしまうと、少くとも1人1人で授業活動が出来るような性格のものについては問題でなくなるとも言える。

そうなると、集団的な活動をする場合、例えば、ディスカッションなどのような場合の授業分析の方式を改めて考えなくてはなるまい。それはどこまで精細に出来るか知れないが、基本的には観察記録の如きものにたよるしかないのではないと思われる。